海外子女教育だより

気　球　船

海外子女教育総合HP: http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/main7_a2.htm

第 225 号
平成21年5･6月
文部科学省
初等中等教育局
国際教育課
編集・発行
初版発行昭和62年12月

世界の窓

日々変化する上海に赴任して

上海日本人学校虹橋校
校長　　藤永　福子

人より車が優先！

上海は，人，人，人，車，車，車で，とても賑やかで忙しい町です。タクシーに乗ると車間距離が詰まって今にもぶつかりそうになります。タクシー運転手は，前の車が遅いとクラクションをがんがん鳴らして警告します。車は常に右折が出来ますので，信号が青で横断歩道を渡っているときでも，左を見て，右を見て用心して歩かなくてはなりません。赴任した当初はなかなか横断歩道を渡ることが出来ませんでした。今でも，信号がない道を横断するときには中国人と一緒に渡るようにしています。本当に此処上海で，人々は赤でもよく横断しています。しかし，車が優先ですので，慣れない者にとっては，信号が青でも細心の注意が必要です。

日本では子ども達に「信号をよく見て，青になって車が止まったのを確かめて渡るのですよ。」と言っていたのですが，この国では全く当てはまりません。国が違うと子ども達に言うことも異なることを実感しております。本校には，「子ども達だけで外を歩かないように」という決まりがあります。

〔車で溢れている高架路〕

万博に向けて工事中！

2010年の5月1日から10月31日まで上海万国博覧会が開催されます。その会場の附近のみならず，本校の周りも工事，工事です。

赴任して虹橋鎮（役所）に挨拶に行ったとき，所長さんが「万博に向けて予算をもらったので，学校の周りもきれいにしてあげましょう。」と言ってくださいました。それから，1ヶ月もたたない間に，学校周辺の道路の再舗装が2日でなされ，周りの公寓（アパート）の塀が塗り替えられ，塀に延々と植木鉢が飾られ，歩道に50m間隔で置かれていたゴミ箱も一日にして取り替えられました。

また，延安西路（幹線道路）の至る所で道路の舗装や植栽のやり換えなど，本当に一晩で変わってしまいます。予告がありません。塀のペンキ塗りなど，持ち主に告げずに勝手に実行します。中国の政府の方針として相手の利益になることは言わなくても実行してよいのだそうです。学校の近くで地下鉄の工事もあっています。本当に市内の至る所で工事中です。中国も不景気であると言われていますが，此処上海は万博に向けての建築ラッシュで，町に活気が溢れています。

子どもに優しい中国の若者

バスや地下鉄に乗るときに，降りる人を待たずに，我先にと乗り込む姿もよく見かけます。悠長にしているとなかなかバスや地下鉄に乗れません。

しかし，地下鉄やバスに乗ったとき，私は実にさりげなく若者がお年寄りや赤ちゃんを連れた母親に席を譲る光景を幾度となく見かけました。実際，私も，若い女性から席を譲ってもらったことがあります。

日本の地下鉄では，シルバーシートにでも腰をかけて携帯電話でメールを打っているか，ペチャクチャ話している若者の姿ばかり見かけますが，

中国の若者のお年寄りや子どもを大事にする教育については本当に感心しています。

虹橋校の子ども達

本校の児童数は，4月15日現在1,339名です。昨年同期と比べますと日本の不景気の影響などから，若干減少しましたが，それでも千名以上の大規模校です。

本校の雰囲気は，日本の学校そのものです。教室の様子や廊下など，日本の学校にいると勘違いをしてしまいそうになります。異なっていることは，登下校時にたくさんの大型バスやシャトルバスが正門から入ってくること，朝は，当番の教師が出迎え警備員とで交通整理をすること，下校時は全教師で人員点呼をして見送ること，常時警備員が見廻っていることくらいです。

毎朝50台余りのバスが入ってくる光景を見ると，日本と違うのだなあと，しみじみ思います。

施設は大変整っております。運動場には二百メートルのタータントラックと芝生，全教室冷暖房完備，室内プールがあります。音楽室や図工室，体育館は2つずつあります。また，夏前に体育館に冷房を設置する予定です。　しかし，全ての子ども達が休み時間に運動場に出ると混雑します。怪我の多発を防ぐために，ボール遊び等の制限をせざるを得ず，十分に運動をさせられないのが残念です。

ほとんどの子ども達の上海滞在期間は3年程度です。そのような状況の中で，友達をつくり，一生懸命環境に適用しようと頑張っている姿はいじらしく感じます。子ども達は自宅に帰ると自由に外出できませんので，遊ぶ場所など制限された中での生活をしております。また，上海は習い事や学習塾が周りにたくさんあり，放課後忙しく過ごしている子どもも多いようです。

共通理解・共通実践を

前任の校長先生方の学校教育目標と校訓を踏襲しながらも，私なりの経営をしていきたいと考えて経営方針を示しました。（詳細はホームページ参照）

〔学校教育目標〕

自ら学び，明るく，やさしく，たくましく，
国際性豊かな児童を育成する。

〔校訓〕 独歩博愛

・独歩：自らを育み，自分らしさを発揮して世の中の役に立とうとする精神
・博愛：自他を愛し，よりよい世の中をつくっていこうとする精神

本年度は新しく，子ども達に次のことを実感させる教育の推進を掲げています。

○　わかった，できた，自分ってやればできる！
○　学習や活動っておもしろい！
○　友達はやさしくて大事なもの！
○　先生は子どもを大切にしてくれる！
○　学校って美しくて楽しみがあるところ！

特に，本校のような大きな学校で大事なことは，共通理解・共通実践ですので，今以上に「**共通理解・共通実践**」**できるシステム**の改善を考えています。

外国語学習と現地校との交流

本校は，新学習指導要領の先行実施を行っております。また，全学年週1時間ずつ英語と中国語の学習も取り入れています。英語は，英国・米国出身の5名の講師，中国語は10名の中国人講師が教えています。英語は，学級の子ども達を習熟度別の2つのグループに分けて，中国語は習熟度別に3つのグループに分けて学習しています。

日本も新学習指導要領に外国語教育が入りましたが，在上海ということで，英語や中国語に対する保護者の期待は大きいものがあります。

中国ならではの取り組みとして，現地の学校との交流学習も行っております。実際に，各学校を訪問し，校長先生と話し合いをするなかで，互いに交流する手応えを感じることが，本年度の更なる交流につながっていくのだと思います。学年によって異なり，隔年ごとに訪問しあったり，年度内に訪問と迎え入れを行ったりとまちまちですが，できるだけ定期的に行えるようにしていきたいと考えています。

〔交流相手校〕

1年生：虹橋中心小学校との交流
2年生：上海小学校との交流
3年生：日新実験小学校との交流

4年生：上海協和尚音学校との交流
5年生：呉淡第三小学校との交流
6年生：虹橋中学校との交流

他に，中国ならではの取り組みとして，「チャレンジタイム」の時間を設定しております。本校のPTAの協力により，講師を招いて，京劇，獅子舞，龍舞，中国武術などの鑑賞や体験など中国の伝統文化理解についての教育を行っております。長い歴史と文化をもつ中国に対する子ども達の理解を深めるために，本年度も継続して実施したいと考えております。

〔３年：京劇体験〕

校長として

赴任してから2ヶ月余りが経ちました。校長として7年目を迎えましたが，日々新しい経験，日本の学校と異なる経験をさせていただいております。

まず最初にぶつかった問題は，英語講師の就業ビザの問題でした。本校はコンサルティング会社と契約をして英語講師を派遣してもらっていたのですが，突然その会社の代表が「学校自身が居留許可証をとらないと派遣できない」と言ってきたのです。本校の顧問弁護士事務所に相談に行き，どうにか解決の糸口を見つけました。

次に，中国語のテキストや学習についてのコンサルティングなどの問題も浮上してきました。まだ解決しておりませんが，この話し合いを通して，私自身が学びつつあることは，コンサルティングなどで，成果が見えにくいものにお金を払う契約を結ぶことは非常にリスクを伴うということです。日本ではない外国の地で，契約を結ぶということは，いくら弁護士を通していても，トラブルは起こってくるものだということを実感しています。

契約を結ぶときには，弁護士に確認することは勿論のこと，契約条件をできるだけ目に見える形にして結んでいくことが大切だということを学んでいます。子ども達の学習に支障がないように且つ本校に損害を与えないように心して対処しております。

今年の夏季休業中には，塀の改築，旧校舎のトイレの改築，ベランダの補修，避雷針の増設など，たくさんの契約を伴う工事を行います。これからも様々な問題が起こってくることでしょう。

しかし，常に前向きに，運営委員会や支えてくれるスタッフと連携をとりながら，子ども達に安全・安心を実感させる学校づくり，子ども達の学力の向上，そして上海ならではの教育活動の構築に向けて努めていきたいと考えています。

2010年の5月には，万博会場だけでなく，市全体が更に美しく整備されていることでしょう。このようなエネルギーに満ち溢れている上海に来て，子ども達の教育に携われる喜びを感じています。

特別寄稿

アジアにおける補習授業校の現状と派遣教員の役割

前シンガポール日本語補習授業校
校長　森　宏介

はじめに

私は、平成 18 年 4 月から 3 年間、事実上、初めての派遣教員としてシンガポール補習授業校に勤務した。その間、先輩の派遣教員の皆様の実践に学びながら、自校の学校課題に加え、近隣の補習校の支援のあり方についても考え、できることから実行にうつしてきた。本稿では、派遣教員として過ごした 3 年間で知りえたことや実行したことを紹介することを通して、アジアにおける補習授業校を支援する方途について考えてみたい。

シンガポール補習授業校の概要

シンガポール日本語補習授業校は、平成 4 年 10 月、母親達手づくりの学校として産声をあげた。その後、平成 7 年には日本国政府より、翌年にはシンガポール政府より正式に認可を受け、順調に発展してきた。平成 7 年当時、100 名に満たなかった児童・生徒数も、現在では、300 名規模へと拡大。特に、小学校の子どもをもつ保護者に支持されている。

シンガポール補習校は、「児童・生徒や保護者のニーズに応じた日本語及び日本文化に関する教育を行うことを通して、国際社会に生きる子どもの成長を促し支援すること」を学校の使命と定めている。そして、それを実現するために、母語もしくは準母語レベルの日本語力をもつ子どもに学習指導要領に準じた教育を行う「国語科」と外国語として日本語を学ぶ「日本語科」のふたつを開設し、ニーズに応じた教育を受けることができるようにしている。しかしながら、様々な事情により、年間 40 日、1 週あたり 3 時間の授業時数しか確保できないため、他の補習校のように算数科や理科の授業を行うことができないという課題もある。

特筆すべきは、授業とは別にさまざまな行事を提供していることである。「子どもの日集会」「七夕集会」「お月見集会」「節分集会」等の四季折々の行事を通して日本文化に触れることはもちろん、「書道」や「和太鼓」等、実際に「筆」や「ばち」を手にする体験型学習、そして、日本の学校文化の一端に触れる「運動会」も好評を博している。

シンガポールのカリキュラムマネジメント

前述したように、シンガポール補習校は、年間授業日数で 40 日、授業時間の総数がわずか 120 時間の学校である。したがって、確保できる授業時数は極めて少ない。小学 2 年生を例にとると、学習指導要領に示されている標準時数は、280 時間であるのに対し、同補習校が実施可能な国語に時数は、わずかに 96 時間。標準時数の 3 分の 1 程しかない。それでありながら、同補習校は、日本の公立学校に劣らない質を保っている。何故であろうか。それには、大きく 2 つの要因がある。

ひとつは、指導する教師の質の高さである。子どもの指導にあたる教師はすべて教員免許保持者であることに加え、土曜日の授業に照準を合わせ、平日に学校、あるいは自宅で、指導内容を吟味するなど準備を怠らない。

もうひとつは、教育課程の管理が着実に行われていることにある。同補習校では、指導計画の作成にあたっては、校長が作成する「基底教育計画（単元計画）」をもとに、それぞれの担任教師が 40 日分の指導計画を作成する。その後、毎回の授業に備え、毎時間の授業のねらいや学習活動を細かく記入する「授業計画表」を作成し、授業に臨むとともに、授業後には、授業で気づいた子供の様子や、当日出した宿題を記入する。

教員にとって、この作業は決して楽ではない。しかし、それは、①記録することが、自身の授業を反省することにつながること、②記録それ自体が、来年度の教育計画作成の大切な資料となること、③初めて担任をすることになった教員も、かつての実践を参考にできること等、数多くの利点を備えているのである。

このような日常的な教材研究に加え、十分な事前準備と実施後の評価が行われていること、換言すると、適切なカリキュラムマネジメントが行われているからこそ、厳しい条件であるにもかかわらず、日本の公立学校に劣らない質を保つことができているのであろうと考えている。

派遣教員がいない補習校の状況

派遣 2 年目となる平成 19 年、私は、ベトナム民主共和国のホーチミン補習校の関係者と知りあったことをきっかけに、同校研修のお手伝いをする機会に恵まれた。また、私的な任国外旅行でタイ王国のリゾート地であるプーケットを訪れた際、プーケット補習校の校長と面談し、学校運営上の課題や悩みについての話を聞くことができた。その結果、つぎのようなことがわかった。

①それぞれの学校には個別の課題があるものの、どちらの学校も、100 人以下の小規模な補習校であるため、学校としての形態や機能が十分に整備されていない。また、どちらも財政的に苦しい状況に置かれており、特にプーケットにおいては、５年前のインド洋大津波の影響から未だに脱することができないため、保護者の経済的基盤が弱く、授業料の値上げも難しい。

②学校運営をとりしきる校長は、ホーチミンの場合は、日本から現地に進出している企業の責任者、プーケットの場合は、レストランやゲストハウスの経営者である点は異なっても、教育のプロではないという共通性がある。したがって、人事や財務の分野における経営的な手腕はさておき、直接、児童生徒の指導に当たる教師に対する教育的な指導はできにくい環境にあることは否定できない。

③一般的に、教具や教材を含めた教育情報が不足している。指導にあたる教師も教育経験に乏しく、適切な研修を受けることなく教壇に立つことが一般的である。

文部科学省は、補習授業校の児童生徒数が 100 名を超えると、基幹的要員として教員を１人派遣しており、以下原則として 400 名を超えるごとに 1 人ずつ増員している。しかしながら、180 を超える補習授業校の中で、日本から教員が派遣されている学校は、42 校に過ぎない。特に、アジア・大洋州の補習校で教員が派遣されている学校は少なく、準全日制の補習校を除くと、アジア、オーストラリア、ニュージーランドにひとつずつしかない。

「児童生徒数 100 名を超える学校は、比較的歴史も古く、経営基盤もしっかりしているため、派遣教員の専門性を背景に、自らの努力で、教育水準を向上させていくことが可能である。しかし、教員が派遣されない小規模の学校は、脆弱な経営基盤に加え、専門性を発揮する教員がいないか、あるいは少数であるため、自助努力を発揮しようとしても、何をどのようにすればよいのか、それすらわからないのが現状ではないのか」

そのように考えた私は、補習校同士、互いに相談しながら自校の課題解決に取り組むことが大切であり、そのために、相談できる環境をつくる必要があると考え、「アジア大洋州補習授業校ネットワーク」を構想するにいたった。

アジア大洋州ネットワーク研修会を開催

派遣 3 年目の平成 20 年 8 月 21 日、シンガポールで補習校対象の研修会を企画し、アジア大洋州の全補習授業校に参加を呼びかけた。その結果、ビエンチャン（ラオス）、ホーチミン（ベトナム）、パース、メルボルン（オーストラリア）、カンタベリー（ニュージーランド）の各補習校に加え、日本から全国・海外子女教育・国際理解教育研究協議会、海外子女教育振興財団、タイ国における母語・継承語としての日本語教育研究会からの参加者も加え、18 名の方々のご参加をいただき、研修会を開催することができた。

研修会では、各補習校の現状を報告しあった後、私が、前述したカリキュラムマネジメントや教員研修のあり方について、具体的な事例をもとに発表。もうひとりの派遣教員である、カンタベリー補習校の豆野朋雄校長からは、ニーズや日本語レベルの異なる子供に

適切な教育を提供するための工夫など、教育の専門家として考え実践した内容についての報告をしていただいた。加えて、バンコクで継承語教育に取り組んでいる、深澤伸子先生には、バンコクにおける海外を移動する子供の実態とともに、継承日本語教室における様々な実践について報告していただくなど、幅広い研修内容を準備することができたと思っている。

補習授業校が抱える問題点や課題を協力して解決するためのネットワークの必要性は、以前から論じられてはいた。しかし、アジア大洋州においては、半径 5000 ㎞という広範囲に 30 校あまりが点在するという状況であったため、これまでに、相互に協力することはもちろん、隣同士の補習校が協力し合うことすらなかった。今回、はじめて、補習校６校、国内外の３団体の代表が、シンガポールに集まり、研修会という形で成果を報告したり、質問したりする機会を設けることができたのは画期的な出来事であると言えよう。

さらには、今後、ウェブ上で、それぞれの学校が独自に作成したカリキュラムや指導案、ワークシート等の学習材を共有したり、相互に相談し合ったりする場を設定することに合意することができた。加えて、今後も継続して研修会を開催することで意見がまとまるなど、より強固なネットワークづくりにつなげる可能性がでてきたことは大きな成果であると言える。

おわりに

本稿を締めくくるにあたって、表題に掲げた派遣教員としての役割について考えてみたい。派遣教員は、それぞれの在外教育施設に派遣されているものであるため、派遣教員としての役割の第一は、派遣された在外教育施設における教育の充実発展に寄与することであることはいうまでもない。しかしながら、前述したように、教員が派遣されている学校の周辺には、派遣教員のいない在外教育施設が多く存在している。

そのような学校を支援するために、文部科学省は、派遣教員による巡回指導の制度を設けている。補習校はもちろん、日本人学校に派遣されている教員においては、この制度を活用した支援をお願いしたい。

タイ王国には、チェンマイ、プーケット、シラチャ・パタヤの３つの補習校がある。シラチャ・パタヤ補習校は、本年 4 月より、日本人学校として新たに生まれ変わったが、すべての児童生徒が日本人学校に吸収されたわけではなく、補習校としての機能も残さねばならないと聞いている。バンコク日本人学校は、これら国内の補習校を支援するために、長年にわたって、定期的に補習授業校連絡協議会を開催するとともに、巡回指導を行ってきた。それに加え、昨年からは、ボランティアによる巡回指導も始まった。派遣教員が、休暇期間中に、自ら旅費を負担し補習授業校を訪れ、教員の指導にあたったり、補習校の子供を相手に授業を行ったりする支援である。このような支援は、当該補習校にとって有益であることは当然であるが、私自身がそうであったように、支援する教師にとっても、自分自身の幅を広げる上での得がたい経験となるに違いない。

補習授業校への派遣教員に限らず、日本人学校への派遣教員であっても、派遣教員のいない在外教育施設への支援は可能である。本務に力を尽くすかたわら、補習校にも関心をもち、機会を見つけては、補習校への具体的な支援に汗を流していただくことをお願いし、本稿のまとめとしたい。

事務連絡

平成２２・２３年度在外教育施設シニア派遣教員募集について new

教職員派遣係　小宅　直樹

文部科学省では、在外教育施設の更なる充実を図るため、下記のとおり、在外教育施設シニア派遣教員を広く募集します。

・ 公募締切日
平成２１年７月３０日（木）（当日必着）

・ 第一次選考　書類選考
選考結果は郵便で連絡します。

・ 第二次選考　面　接
８月下旬実施予定。詳細は、第一次選考後連絡します。

面接の結果は、後日郵送により連絡します。

詳細は以下の文部科学省ホームページをご参照下さい。

※文部科学省ホームページ掲載場所について
「ホームページトップページ」(http://www.mext.go.jp/) ⇒「教育」⇒「国際教育」⇒「海外子女教育、帰国・外国人児童生徒教育等（CLARINET)」⇒「平成22・23年度在外教育施設シニア派遣教員募集要項」

平成２１年度在外教育施設教員派遣にかかるスケジュールについてお知らせします new

教職員派遣係　小宅　直樹

平成２１年度の在外教育施設への教員派遣にかかるスケジュールについてお知らせいたします。

なお、本スケジュールについては諸般の事情により変更する可能性がありますことをご了承願います。

【選考試験について】
〔管理職〕
（東京会場のみ、文部科学省）
平成２１年７月２２日(水)～２４日(金)

〔教　諭〕
（東京会場、文部科学省）
７月２７日(月)～３１日(金)
（大阪会場、大阪ガーデンパレス）
８月３日(月)～５日(水)
（福岡会場、ＫＫＲホテル博多）
８月１０日(月)～１１日(火)

【派遣先の決定について】
〔管理職〕
平成２１年１１月下旬頃
〔教　諭〕
平成２１年１２月上旬（登録者）
同　　下旬（即派遣者）

【各種研修会】
〔登録者研修会〕
平成２１年８月２２日（土）
於；学術総合センター

〔管理職研修会〕
平成２１年１月２３日(土)～２７日(木)
於；国立ｵﾘﾝﾋﾟｯｸ記念青少年総合ｾﾝﾀｰ

〔内定者等研修会〕
平成２１年１月２８日(木)～３１日(日)
於；国立ｵﾘﾝﾋﾟｯｸ記念青少年総合ｾﾝﾀｰ

〔配偶者研修会〕
平成２１年１月２３日(土)
於；学術総合センター

【辞令交付式】
〔管理職〕
平成２１年３月１１日(木)
於；東京都内（会場は未定）

〔教　諭〕
平成２１年４月上旬
於；東京都内（会場は未定）

「帰国生のための学校説明会・相談会」のご案内 new

海外子女教育振興財団

海外子女教育振興財団では、今年も東京・大阪・名古屋にて恒例の「帰国生のための学校説明会・相談会」を開催いたします。

各会場では、国内の小学校・中学校・中等教育学校・高等学校・大学までの主な帰国生受入校の担当者が、すでに日本に帰国した、または海外から一時帰国している子どもたち（小学生～高校生段階）を対象とした、帰国生の進学に関するきめ細かな説明や相談に応じます。
入場は無料、もちろん保護者だけでなく、子どもの同伴も可能です。
特に、在外教育施設の先生方におかれましては、この7月に一時帰国または帰国される予定の方にお伝えいただくほか、進路指導担当の先生方も情報収集の機会として役立てていただければと存じます。

〇東京会場
2009年7月30日（木） 13:00～16:30まで
場所：国立オリンピック記念青少年総合センター（東京都渋谷区代々木神園町3－1）
最寄駅：東京メトロ千代田線「代々木公園」駅又は小田急線「参宮橋」駅から徒歩8分

13:00 受付開始
13:00 学校別ブースに分かれての個別説明・相談（～16:30終了）
13:30～14:00
財団教育相談員による講話『学校選択について（仮題）』

〇大阪会場
2009年7月23日（木） 12:20～15:30まで
場所：毎日新聞ビル オーバルホール（大阪市北区梅田3-4-5毎日新聞ビルB1）
最寄駅：JR「大阪駅・桜橋口」より徒歩8分など

12:00 受付開始
12:20 財団教育相談員による講話『帰国生受け入れの概要について（仮題）』
13:00 学校別ブースに分かれての個別説明・相談 （～15:30終了）

〇名古屋会場
2009年7月24日（金） 13:30～16:00まで
場所：名古屋国際会議場（名古屋市熱田区熱田西町1-1）
最寄駅：地下鉄名城線「西高蔵」または名港線「日比野」から徒歩5分

12:30 受付開始
13:00 愛知県教育委員会による講話『愛知県立高等学校における帰国生受け入れの概要について』（予定）
13:30 学校別ブースに分かれての個別説明・相談（～16:00終了）

各会場の参加校・詳細スケジュールにつきましては随時財団ホームページに更新していきますので、ご確認ください。
http://www.joes.or.jp/

（財）海外子女教育振興財団 情報サービスチーム
E-mail sanka@joes.or.jp
TEL +81-3-4330-1349
FAX +81-3-4330-1355

MESSAGE

＊国際教育課「気球船」編集部より＊
本誌へのご意見、ご感想をお待ちしています。下記までご連絡ください。
連絡先E-mail：kokukyo@mext.go.jp
こちらも随時募集中です。
〇投稿記事
（原稿料は出ません。ご了承ください。）
〇新規配信依頼

～5･6月　日本の小窓～

※保護者の了承を得て掲載しております。
（写真提供:国際教育課　大橋）

《編集後記》

そろそろこちらは梅雨入りの季節となりますが、皆さま如何お過ごしでしょうか？今号では5･6月の日本の風景を何枚か載せてみました。鯉のぼりをバックに元気に走る子どもの姿がとても微笑ましいです。

ここ最近は新型インフルエンザ対応に追われることも多かったかと思います。このような事態にもますます迅速に対応できるよう皆さまと連携を深めていけたらと思います。

（5･6月号担当　教職員派遣係）

～5･6月号の内容～～

【世界の窓】―――――――――――――― 1

〇日々変化する上海に赴任して -------- 1

上海日本人学校虹橋校校長　　藤永　福子

【特別寄稿】―――――――――――――― 3

〇アジアにおける補習授業校の現状と派遣教員の役割 ---------- 3

前シンガポール日本語補習授業校校長　森　宏介

【事務連絡】―――――――――――――― 7

〇平成２２・２３年度在外教育施設シニア派遣教員募集について ---------- 7

〇平成21年度在外教育施設教員派遣にかかるスケジュールについてお知らせします ---------- 7

〇「帰国生のための学校説明会･相談会」のご案内 ---------- 8

～5･6月　日本の小窓～ ---------- 9